

〈失われた時〉を見出すとき（一六五）

木下 長宏

十何年前の『八雁』の集まりで『仮名』書の磁場——和歌^{うた}の底流を求めて」という題で話をしたことがあった。草仮名と呼ぶ文字の書しかた（筆の遣いかた）が、書体の問題に納まらず、日本列島で営まれる芸術行為すべてに、それぞれどこか、そこに生きている人間みんなの思考と振舞に、一つの磁場を作つて形の現れを促している、「草」というのは、中国大陸から伝えられた書の世界で言う「真（楷）行草」の「草」なのだが、この「三体」は、昔から絵画の世界でも借用されていて、狩野元信は、画に三体ありと教えているし、葛飾北斎には『三体画譜』という木版画集もある。

この「三体」意識は、現代のわれわれの日常生活にも生きていて、少し改まった場へ出かけるときは「真」の格好をして行こうと着る物などを選ぶし、普段は気楽な「行」のスタイルで過ごし、ときどき解放された場で「草」を楽しむようにする。そんな「草」の変幻する現れかたを「磁場」と呼んで、

そこになにか隠れた法則（磁場なのだから）が働いていないか、考えようと、平安時代から江戸時代の作例をいくつか採り上げてみたのだった。

それから十年、折に触れてこの問題を考えてはいるが、いまだに「法則」などを提示出来るには至っていない。

この「草」とは、声だけで伝え合っていた古倭言葉を文字化しようと考え出された、万葉仮名の「草」体である。「真行」は中国と同じ型だが、「草」は日本で独自に考え出された（平仮名と呼ぶ）書体である。

『古事記』の成立は和銅五（七一五）年と伝えられており、『万葉集』の最も古い歌は（諸説あるが）舒明朝（七世紀前半）の頃のもので、それ以前の仁徳天皇や雄略天皇の歌は、のちに伝承歌を編集再録したと考えられる。その頃すでに『古事記』の序からも読めるように稗田阿礼が誦習していた「帝紀」など文字化された天皇記があり、『万葉集』でも、「柿本人麻

呂歌集」から採ったという記述などもある。

『古事記』『万葉集』以前に、この世から消えていった記録や歌集があった。それらは、稲荷山古墳の鉄剣銘や法隆寺金堂薬師如来光背銘文のような倭風漢文で、書体は「楷」「行」体の大陸風書体で書かれていたのだろう。いずれにせよ、倭言葉自体は、文字化されなかった。文字より「声」の持つ力が大切にされていたようだ（『古語拾遺』）。

八世紀から九世紀にかけて、倭言葉を文字化し書記する作業が、急速に試みられるようになっていった。それまで土の塊である土偶や土器に線紋や模様を、彫り込んだり盛り付けたり、衣類を編み形を整え、布や身体を染め（刺青）たりして、図柄や模様を作ってきた作業と決定的にちがう「なにか」を発見し、自分のものにする喜びを見つけたのである。

土器に模様を付けたりすることも、「永遠」をそこに閉じ籠める願いに支えられていたが、声を文字にしたときに受け取る「永遠」の手応えは、現代の言葉に言い直せば、出来事や思いを抽象的な概念として対象化出来る喜びに裏付けられていた。情感や思考を他者として扱う手応えである。もちろん、声を出してなにかを語り謡うときにも、この手応えと喜びはあった。しかし、それは発するとすぐに消えて行くものだった。消えて行くことに「永遠」を見ていた。文字は消えなかつた。

この列島での造形行為の最初期、縄文章創期の三重県粥見

井尻土偶を思い出してみると、土塊をぎゅっと握ってぱつと開いたその掌の中に、人形を見つけた（土偶の誕生）、その昂揚。この人の身体の幻型に土を摘んで首と乳房を付け、それは、自分たちの姿形の「見立て」となって、その「見立て」を通して「永遠」なるものを感じ取ったのだ。だが、声を文字にしたときの「永遠」の感触は、人びとの美と知の活動をもう少し高いレベルへ導く喜びだったにちがいない。

『万葉集』のなかの万葉仮名表記に、こんな例がある。「若草乃新^{くさの}手枕^{にたま}乎^を巻始^{まき}而^{めて}夜哉^よ将^を問^を二^{ふた}八十一^{はちじゅういち}不在^あ国^{くに}」（巻十一 25 42）。「八十一」と書いて「くく」と読ませている。「八十一」の例はいくつもある（巻八 1495、巻十三 3242、3330）。算術九九の唱文を訓にする例は、「しし」を「十六」と表記する例（巻六 926）、「し」を「二」（巻六 907）と、などもあり、この表記法はかなり普及していたようだ。

「出」という字を（やまのうえまたやまあり）「山上復有山」（巻九 1787）と書すなごもあり、万葉人の仮名表記に対する遊び振りが読み取れる。消えない「永遠」を手に入れて出来る遊びだ。

この一首には「天平元（七二九）年」の年記がある。

この遊びは、また過激な遊びではある。草仮名の発明とこの過激な遊びは、遠くの方でつながっている。既成の枠をちよつと壊して、思いがけない発見を悦び合う発想が共通している。俳諧も、その源流はこんな遊びに遡れそうだ。

万葉仮名から平仮名の発明（その間、片仮名も創案され）、

そして草仮名の創出へ。この間の動きは、その後の日本列島における美と知の営みに決定的な働きを遺したようだ。

その最も大きな成果は、漢字に抛る思考の表出と仮名書に抛る表出という二つの表出の軸を持ち、二つの軸を決して一方を排斥するのではなく、自在に使い分けて、美と知の畑を耕かす術を身に着けたことであろう。この二つの軸は、またそれぞれに、そのなかで新しい軸を産み、文化の精華を多彩にかつ豊潤にして行く。

草仮名で書記されたと考えられる平安時代の諸文学作品の当初の原本は遺っていない。たとえば、『源氏物語』は、いまわれわれは、藤原定家一統が写した青表紙本を底本にして、それを原本のように読んでいるが、定家の時代はもう漢字仮名交り書体が勢いを持っていたから、紫式部自身が書いた文章と姿形はかなり変ってしまったのではないか。式部は、ほとんど漢字を使わない「秋萩帖」や「高野切」のような書体で書き遺していたのではなかったか。句読点、濁点もなかった。

徳川美術館や五島美術館が所蔵する絵巻は式部の頃より百五十年くらい後の平安末期の作と言われており、その詞書の書体は「草」の能筆だが、かなり漢字が交じっている。

ここでは、明朝体活字にして再現するしかないが、いつれのおほんときにか によくこかうい あまたさふらひけるなかに いとやむことなきにはあらぬか すくれてとき

めきたまふありけり……と書き写していると、通行出版物の漢字仮名交り「源氏」とどこやらちがう雰囲気か匂うてくる。文章の奥から湧いてくる声が聞こえるようだ。

そのとき『伊勢物語』のことが閃いた。『伊勢物語』は『源氏物語』より百年くらい早くに作られているが、いろいろ増補編集の過程を経て、やはり定家の校訂したものが流布本となっている。われわれが読んでいるのは、源氏も伊勢も文章の姿は鎌倉初期の産物なのだ。

紫式部が源氏を書くに当って『伊勢物語』を読み込んだことは多くの解説書に記されている。『伊勢物語』は、和歌の詞書の部分を物語に仕立て、それぞれ、和歌の誕生事情を語りつつ、一人の男が元服したときから亡くなるまでにやりとりした歌を、全百二十五段（百二十五話とは言えない、九段など三話が一段に収められていたりする）、ほぼ時系列に並べて行く。こちらにも、いちばん始めには草仮名で書かれていた様子を想像しながら、活字にしてみよう。

むかしをとこ うひかうふりしてならのみやかすかのさとにしろよしして かりにいにけり いとなまめいたるをんなはらからすみけり このをとこかいまみてけり おもほえすふるさとにいとほしたなくありければ こゝちままとひにけりをとこのきたるかりきぬのすそをきりて うたをかきてやる そのをとこ しのふすりのかりきぬをなむきたりけり かすかのわかむらさきのすりころもしのふのみたれかき

りしられず

となむおいつきて いひやりける ついておもしろきことともやおもひけむ

みちのくのしのふもちすりたれゆゑにみたれそめにしわれならなくに

といふうたのこゝろはへなり むかしひとは かくいちはやきみやひをなむしける

初段全文である。書き出し出すと途中で止められない。

伊勢、源氏の二つの物語は、その後江戸時代へと、いよいよ、人びとの表現作法の隠然たる規範となつて行く。

この二つは、その文体、記述の方法がまったく対極的である。どちらも、一人の貴公子の女性遍歴を語りながら、『源氏物語』は、その登場人物の心理に深く分け入り、情景をしっかりと描写し（さつき引用した冒頭部分に情景描写はないが、たとえば「須磨」の巻、夜更けて秋風と波音に寝つかれない光源氏の描写などだろうか）読者を登場人物に感情移入させて行く文体を心憎いほど練り上げ完成させている。

それに対して『伊勢物語』は、総量も短く、人物描写などほとんどない。「むかしをとこ」と書き出し、その男がどんな風采かの記述もしない。奈良春日野と地名は添えたが、「古里」がどんな鄙びたところかも伝えない。文字によって物語が書き継がれているが、口承説話の文体を濃く匂わせる言葉振りである。著者は不明。一人ではない。

『伊勢物語』は在原業平をモデルにしていると誰もが疑わない。しかし、全百二十五段訥々と男の女との出会いと別れを語る文章の、どこにもその「男」が「在原業平」だと誌してはいない。引かれた和歌に業平作が多いので、業平を想起させるように語つて行く。その語り振りは、控えめで、素朴でさえあり、読みながらそこから響き出る「声」と「像」の働きを読む者に任せている。そのことが、かえつて逆に作用し、この「をとこ」を史上の実在した人物に重ね合わせ解釈を蔓延させることにもなったのだろう。

『源氏物語』は、反対に著者紫式部は、文字としての言葉の限界をよく心得ていて、一つひとつの言葉の働きを最大限に發揮させようと文章を綴つて行く。『源氏物語』の文体は、当時の女性に無用だと思われていた漢文学の知識が深く滲み込んでいる厚みのある文体である。

紫式部が『伊勢物語』から学んだ最大の収穫は、『伊勢物語』が素朴な語り文体で遺しておいた文字の表面に現れ出ない余韻（それを縄文以来列島に培われてきた〈無文字文化〉の遺産と呼びたい）を可能なかぎり「文字」にしようとしたところにあるのではないか。そのとき、この二つが広義の文体の規範になる。そしてこの二つは「草」から生まれた。

この二つの物語が、その後の日本列島の美と知の生成に遺したものは測り知れない。それを探して行くのは、根気のいる仕事だが、楽しい作業だ。現在を考え直す励みにもなる。